

# 五歳児の規範意識—食の場から—

金澤 妙子

## Five-year-old's Awareness of Model Behavior while Eating and Their Coping Strategies : Findings from an Observation of Eating Behavior at Childcare Facilities

Taeko KANAZAWA

### I. はじめに

乳幼児期の発達・育ちは私たち大人の世界に入ってくる過程でもある。家庭生活から集団生活へと生活の場を広げることで、この場・環境、人々の中で共に生活していくには何が求められているのか、自分はどうしなければならないのかの意識が芽生え、育っていく。しかし、その過程は一方的に従わせられたり、守ることが要求される中でではなく、園での遊びや生活を通して子ども自身が規範の存在に気づきその必要性を実感しながら獲得されていくこと、そしていずれは、示され、求められてきた他者からの評価や価値が自身の中に内在化していくことが目指されている。

それは、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の中では、とりわけ領域「人間関係」に明確に言及されている。「⑨よいことや悪いことがあることに気づき、考えながら行動する」<sup>1)</sup>「⑩友達と楽しく生活する中できまりの大切さに気づき、守ろうとする」<sup>2)</sup>という共通する内容の記述はそれを示すものである。さらに、上記⑩は幼稚園教育要領と保育所保育指針において、それぞれ以下のように説明される。

「(5)集団の生活を通して、幼児が人とのかかわりを深め、規範意識の芽生えが培われることを考慮し、幼児が教師との信頼関係に支えられて自己を発揮する中で、互いに思いを主張し、折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気づき、自分の気持ちを調整する力が育つようにすること」(点線筆者)[幼稚園教育要領第2章 人間関係 3内容の取扱い]<sup>3)</sup>

「保育所の生活の様々な場面には、順番を待つなど、生活や遊びをスムーズにするための決まりやルールがあります。

子どもはまず、保育士等の関わりや言葉がけにより、このような決まりの存在に気づきます。また、保育士等に助けられて決まりの意味を理解したりしていきます。年齢が高くなるにしたがい、

友達と一緒に簡単なルールのある遊びを楽しむ中で、次第に決まりを守ることができるようになります。また自分と友達の欲求や思いがぶつかりあった時には、決まりに従うことで解決に結びつきやすいことにも気付いていきます。保育士等は、状況をよく把握しながら、子どもたち自身が様々な感情を表しながら、ルールを作ったり、ルールを変えたりなど仲間の中で調整したり、工夫したりする姿を見守り、必要に応じて援助します。

子どもはこうした子ども同士のやり取りや集団での活動の中で、徐々に規範意識を身に付けていくのです」(点線筆者)。[保育所保育指針第3章 人間関係(イ)内容⑩]<sup>4)</sup>

柴崎は、規範性という言葉には、社会的なルールを守るという意味があるとしたうえで、現行の幼稚園教育要領の改訂でこの言葉が入った経緯について以下のように話している。「検討委員から必要だからという意見が出たのではなく、小学校以上と共通して入ったのです。「学校教育法」に「規範意識の芽生えを養うこと」という言葉が入り、幼稚園教育要領にも入ったという経緯があります。ですから、「芽生え」ということを強調しています。

中味としては、(略)集団で生活していく中で、周りと合わせて生活していくべきことはわかっているけれども、幼児ではまだなかなかできにくいわけです。そんな場合にも、自分たちで折り合いをつけて何とか調整しようという気持ちが芽生えるようにということで、幼児期後期の問題として考えています」<sup>5)</sup>

規範をキーワードに見てみると、最近では、辻谷の一連の研究がある<sup>6) 7) 8)</sup>。辻谷は幼児間の「規範提示」に着目し、仲間関係における「排除(仲間外し)」「包摂(仲間に入れること)」<sup>9)</sup>との関連について2人の女兒と他児との関係に焦点化して観察記録を分析、検討して以下のように述べる。「規範からの逸脱の「可視化」が、提示される側への「特定の見方」につながり、「排除」「包摂」に関わってくることや、幼児間の規範の「共有」から生じた連帯により他児の「排除」につながるといったことが示唆された。それらは保育者の働きかけや、その意図に対する幼児自身の感受性なども密接に関わっており、時期的にも変容していく」<sup>10)</sup>。

また、幼稚園の4歳児クラスでの観察を通して、幼児が規範の重要性にどのように気付いていくのかを検討している。それによれば、「1) 規範提示の根拠には提示者側の伝えたい意図だけでなく、他者への意識が含まれるということ、2) 園内で共有されている規範については保育者が根拠として提示される一方で、多くの場合は規範の根拠が示されないことが分かった。それらの規範を示す必要がない、あるいはそれらの規範に根拠を想定していないことが示唆された。保育者には子どもたちが他者との関係性の中で規範の重要性やその根拠に気付くような援助が求められる」<sup>11)</sup>としている。さらに、幼児が規範の必要性を他者との関係を通していかに理解していくのかを、幼児が他者に許可を求める発話に着目して、「幼児が大人の権威を参照するばかりでなく、他児に対してもその意図を参照していること、さらに許可を求められた際の保育者の応答が、幼児自身に考えさせ、自ら規範の必要性に気づかせる援助につながる」<sup>12)</sup>ことを明らかにしている。

私たち大人と異なり、乳幼児期の子どもたちの1歳の違いは大きい。それぞれの年齢に独自の魅力もある。3歳児の規範意識については、松永ら<sup>13)</sup>が、その芽生えの時期と捉え、身体的同調に

よる非言語的な応答関係による「居場所」生成の重要性を指摘している。

ここでは、5歳児について考えたい。私たちとほぼ同様、言葉で語ることのできるようになった5歳児は、自分の思いを言葉で表現する、説明してくれる。そのため彼らが規範を内在化していく際の逡巡や考えていたことをより深く知ることにもなる。また5歳児という、乳幼児期の仕上げの時は、子ども自身も小学校という新しい世界の入り口を意識するようになり、本当はこうしたい自分の思いと社会や周囲の大人から求められ、示されてきたこうあるべき自分との間で、自ら調節していくようになる。保育者をはじめとする周囲の大人たちは言語的であれ非言語的であれ、その時々における規範とその価値を示し続けてきた。乳幼児が成長するという事は、私たちが価値とする世界に入ってくることでもある。5歳児で終わりではないにしても、乳幼児期の集大成の5歳児後期、子どもも保育者をはじめ周囲の大人も就学を意識した頃に、子どもは私たちの社会にある規範にどのように向き合っているのか、規範をどのように獲得してきているのかを、保育実践事例に拘って考えてみたい。

また、また青井<sup>14)</sup>は仲間入り場面における規範の機能を論じている。生活場面では、辻谷の論文の中にも片づけ<sup>15)</sup>や「好ましくない行動をした者はお弁当を食べられない」というような形で、食べることに触れる場面が出てくる箇所はあるものの<sup>16)</sup>、全体としてはやはり遊び場面での対人関係が多い。食事をとる・食べるという生活場面でのことは、すでにすべきことが決まっているというスタティックなイメージを持たれる傾向がある。しかし、子どもが自分自身を打ち込んでいく遊びやその中で調整し、乗り越えていく人間関係と同様、生活に関わる場面でも主体的な取り組みが多々行われているという考えを持ってきた。保育者側から言えば、そこでも遊びと同様主体性の育ちが目指されている、目指されなければならないということである。むしろ、私のように保育者ではなく、外部から部分的にしかかかわらざるを得ない立場の者にとっては、子どもの1日丸ごとを日々見ることは不可能であるが、食事の場を共にすることで、自分が見ていない日や場面のこともそこに集約して現れるように思い、食事は子どもの中でとることにしている。遊び場面での対人関係だけでなく、そうした生活場面、特に食べることに関する場での規範性、規範意識を明らかにしていきたい。

## II. 方法

### 〈参与観察した園について〉

地方の小さな市にあるA園は、参与観察時全園児約50数名、3歳未満児（0、1、2歳混合、以下文中、未満児と略記）、3歳児、4歳児、5歳児、各1クラス編成の公立保育園である。

### 〈観察期間と頻度など〉

20XX年から約3年間、週1回～月1回の頻度で保育実践に参加して、保育中にとったその場での記録・メモを基に保育終了後に起こした観察記録、私自身と子どもとのかかわりの思い出し記録、

保育者や調理員など職員とのやりとり、記録作成段階での疑問や質問について聞き取りを行って明らかになったことを省察する。子どもの名前は意味のないアルファベット表記とした。

### Ⅲ. 様々な5歳児の姿の検討—嫌いなもの・苦手なものにどう向き合うか

食事でどの年齢にも大事なことは、食べようとする意欲と楽しい雰囲気である。そのためには、食卓を囲む人との関係、食べるものへの嗜好、場の雰囲気、空腹感が必要である。食べるものへの嗜好について言えば、おいしいと食事の場が楽しいということは、嫌いなものがあると楽しい場ではなくなるということである。保育者にとっては、好き嫌が多い子どもや偏食の子どもが無理なく様々な味に慣れ、嗜好の幅を広げていくにはどうしたらいいかが課題となる。食べられるようになって欲しいという思いで、ついおだてて食べさせがちなかかわりも生まれる。だが5歳児後期ともなると、それまでの家庭や園でのかかわりで示された価値を基に自ら調整したり、折り合いをつけながら向き合っていく。就学が間近の2月の子どもの姿を切り口に、それまでの観察と合わせて考えていく。

#### (1) T男の場合—1つ1つ乗り越えて

この市の公立園には、月1回、特別食の日がある。普段、主食が提供されるのは3歳未満児だけで、3歳以上児は主食を持参するが、特別食の日は全員の主食が園で用意され、メニューもいつもより豪華である。園によってその呼び名は違い、この園ではハッピーデーと言っている。昼食は基本的には普段はクラスごとでとることが多いが、ハッピーデーでは、未満児クラスを除く全園児がホールで会食をする。年度末も近づいた2月1日のハッピーデーは未満児クラスのうち2歳児も、4人用テーブル2つに分かれて、初めてホールに出てきて、いつもに増して大勢で賑やかな会食となった。主食皿は和風スパゲッティ、副食皿には鳥の照り焼きにサラダとミニトマト2個、かきたま汁というメニューだった。

午前中、鬼退治と節分の集会でハラハラドキドキ盛り上がった後ということや、雰囲気もメニューもいつもと違うこともあつてか、おかわりをする子が続出、保育者も「おかわりたくさんあるよ」と子どもを誘っていた。そうした保育者の声を受けてのことと思われるが、私のそばにいたT男は「俺、お肉のおかわりしよーつと」と言いながら食べていた。

私は、両方の皿のものを全部食べ終わらなくても、主食を食べながら、さっぱりしたサラダがなくなったので欲しいという時にはよそってくる、ミニトマトをもっと食べたいと思えば何度も取りにいくという、勝手な食べ方(子どもたちは絶対しないと思われる)をしていた。T男は何事につけ、自分のスローなペースで暮らしている子のように私には写っていた。担任もそういう捉えに、別段異論はないのではないかと思う。

T男は、食べ始めの早いうちから肉のおかわりを宣言していたのに、スパゲッティと鳥の照

り焼きがなくなっても、まだ副食皿に付け合せのサラダとミニトマトが残っているのでおかわりには行かない。「どうしょっかなーどうしょっかなー」と両手を上に組んで上体をくねらせたりしているので、(黙って観察していればいい、余計なことだと思いつつ)「それ、食べられるなら食べておかわりに行けばいいけど、食べられないなら、もうおかわりしてきたら」などと、私が横から口をはさんでも、「どうしょっかなーどうしょっかなー」「すっぱいのがきらいなんだよね」などと言って、ちょっと肩を落としてサラダの中のコーン(材料の中で一番甘いと思われる)を拾って食べた。

この日のサラダは、りんごのすり下ろしが入ったドレッシングがタマネギやレタス、キャベツ、キュウリ、人参などに和えてあって、私は甘酸っぱくておいしく感じていた。調理室で作り方を聞いてきた保育者がちょっと得意げに、「リンゴのすりおろしとレモンなんだって…」と話し、「作ってみよう」という声が出るなど好評だった。しかし、子どもの頃は、酸味は苦手かもしれない。蛸とキュウリの酢の物など、酢と和える前に蛸を拾って食べていた記憶が私にもある。

たまに来る、保育者とは違う、格別親しくもない私だから、苦手なら食べなくてもいいよと背中を押すような言葉をかけてもおかわりに行かないのかと思い、テーブルについたまま、私の斜め後方の配膳台にいる担任にこの状態を告げると、笑いながら、「もうお肉が、最後の1つになってしまいましたー」と実況中継風に残数を知らせて誘ったり、もっと直接的に誘う言葉もかけてくれるが、おかわりには行かない。コーンを拾って食べた時には、私は何となくコーンだけ食べて残すと思っていたサラダの野菜も、気がつくとも全部食べていて、それでもまだおかわりには行かず、トマトを箸でつついて「んー、これが…」などと言っていた。

そうこうしているうちに、ある男児が配膳台へ行き、「お肉、おかわりする」と言い、担任が「どうぞ」と応じている声が聞こえてきた。担任の実況中継も「あー、売り切れです！お肉はなくなりましたー」となり、2メートルほどの所にいるT男の耳には当然聞こえていると思うが立っていかないし、配膳台の方も見なかった。T男がおかわりに立ったのは、(心配した)担任が様子を見にきて、「T男ちゃん来ないから、もうお肉なくなったよ。おかわりするならしないと、お皿、給食室に返しちゃうよ。○さん(調理員)、待ってるもの」と言うからだった。

ミニトマトは2個とも、齧ったままでとうとう食べられなかったが、苦手な酸っぱいもののうち(食べやすい)コーンから始めて、きれいに食べているところに、自ら克服(?)しようという意思を感じた。その後、担任から、スパゲッティはまだあるが、もう時間が無いし面倒なのでキノコはとってやれないから、おかわりするなら自分でとって食べるよう言われて、うなずいていた。よそってもらったスパゲッティの中から、キノコをつまんでよけながら1人で食べる姿があった。

### ① 言葉の向けられた先は自分？

私とT男は特に親しいわけではない。私が彼のいるテーブルに座ったのもたまたま空いていたからだった。苦手なものへの表現としての「どうしょっかなーどうしょっかなー」は、最初、私に向けられているような気でいた。しかし、彼の言動(下線参照)はすべて皿の中を見て発せられていた。「酸っぱいのがきらいなんだよね」という言葉は、自分を少し客観的に捉えている気もする。

私の見方に担任は、「妙子さんに聞いてほしかった、分かってほしかったのではないか」と言う。隣にいたわけだから、まったく関係なくもないだろうが、彼が2歳の時から、そのクラスに入っていたが親しいわけではない私との関係、ずっと皿の中を見ていたT男を思い出すと、食べられない、苦手な自分に向き合っていた気がする。

### ② メニューにおけるT男にとっての肉の位置

この日のスパゲッティには、シメジ、エノキダケ、シイタケが入っていた。担任の話では、T男はキノコ類は一切食べ(られ)ないという。前回(秋?)、スパゲッティが出た時、キノコが入っていたためにまったく手をつけなかったことを知っていた担任は、主食を取りにきた彼に「Tちゃん、キノコだよ。どうする?」と言うと、「えー」(引き気味な感じ)と言っていたので、スパゲッティの中からキノコを全部とってあげ、彼は「ありがと」と言って皿を持っていったそうだ。

サラダとトマトは(食べてみたら)酸っぱくて苦手、食べられないものなので、この日のメニューで彼が抵抗なく食べられるものは、かき玉汁と肉だけということになる。それしかなくておかわりしたスパゲッティも手放しで好きなものではなかった。しかも時間の関係で(最初のように)キノコを除いてやれないと言われてもおかわりをして、キノコをよけて全部たいらげたということは、おかわりをしたいお腹の状態だったと思われる。

5歳児が、その時の自分が食べられるものと自分の空腹感を前もってどれほど斟酌するのか分からないが、この嗜好状況の中、肉をおかわりしたいと思いつつその誘いに乗らなかったのは、最初に配られたものを全部食べてからおかわりする・しなければならないというルールが内面化していることを示すものだと思う。私のような勝手な食べ方をする大人が隣にいても、この人がやっているから自分も、周囲の大人が勧めるから…とはならない、揺るがないものとしてある。

お別れ会(3月19日)に、全園児で室内でかくれんぼをした。トイレや遊具庫、職員室など入ってはいけないところが多く、どこに隠れたらいいの?という感じで始まった。私がビニールで覆われた布団収納庫に隠れようとしていると、3歳児が2人ついてきた。私たち3人は見つからずに鬼を降参させたが、保育者に「妙子さん、そこは(入っては)だめなのよ」と言われた。始める際に、入ってはいけない場所をみんなで確認した時、入ってはいけない場所には拳がらなかったが、入る時、私も一瞬、もしかしたらだめかもしれないとは思った。確認するまでもなく、当然入ってはいけない場所として認識されているということだろう。確かに、日頃子どもはそこに入らない。だが、そばにいる大人が入るのを見れば、自分もとついてくるのが3歳児なら、そうしないのが5歳児なのだと思う。

### ③ 担任の捉えとすり合わせて

2月1日の昼食時のT男をめぐる私の見方に、担任は以下のように言っている。

《(T男の) 食事のことをそんなふうに考えたことはなかったが、食事だけでなく、またできるできないではなくて、春の頃から一つひとつ着実に自分のものにしていっているなど思うことが多くなった。ドッジボールも、入っているが投げても当たりもしないし、すぐに当てられるが、そこにいるのが当然という意識がある。運動などからだを動かすことは、入っていてもそれほど好きとは思えないが、木登り、うんてい、タイヤ跳び、一輪車ができるようになった。

目に見えることが多く、また言いやすいが、そういうことだけでなく、心地よく親しくしてられるS夫にも、以前は言われるままで、いやな時は「え〜」っと抜けていって、もめるなら俺はいいよという感じだったが、今は「俺は、それはいやなんだよー」と言い返せるようになった。今はS夫もT男を認めていて、T男の言っていることを聞いたりする。いつも一緒にじゃなくてもいられる、1人でもいられるようになったなあと思う。一輪車も、最初は「こんなタイヤが1つのなんか乗れるわけないよ!」とほおり投げていたが、時間を置いては誘い、少しできると「できるでできる」と声をかけて意図的に支えたり、乗れるようになっていく周囲の子どもの様子を見ていたこともあるだろうが、どんどんではなにして乗れるようになっていく取り組みなどにも感じる。

3月初め、とても大きなダンボール箱が2つ空いて、それで家を作ると子どもたちが持っていった。箱に自分の名前を書き、その子たちだけしか入れないと言う。1つは数人の共有だが、もう1つは、T男1人で名前を書いて使っている。周りもそれを認めていて、戯れに私が入ると「T男ちゃんの家が壊れちゃうじゃない」と言われる。彼がクラスの中で認められていることを感じる。》

—こうした言葉の背景に、担任がT男の変容の手ごたえを感じていることが察せられた。相関関係があるかどうかを立証することはできないが、食事以外の面でも不得手なものに向き合い、乗り越えていこうとすることは見られるようで、広がりや深まりがある。

### (2) M子の場合—場をわきまえて

[(1) と同日、] 別のテーブルでは、1人残ったM子が最後にミニトマトを食べるさまを担任が、後片付けをしながら、「M子ちゃんったら、おかしいー。涙流してトマト食べて。いやだったら残せばいいのに…」とその様子について、笑って言っていた [1個は食べたが、嘔吐しそうであったため、2個目は食べるのを止めさせた気がすると担任]。

### ① これまでの姿から

今、3歳児の時の担任は当時を振り返って、「3歳児で入園した時は、ごはんしか食べられなくて、野菜を口に入れるとオェツという感じになった。母親からは、家ではご飯に店(飲食業)で出す餡(天心ラーメンか何かの)をかけて食べていたと聞いていた。母親は困って何とかしたいというふうではなかったが、私は少しは食べてみようよというかわりをした。3歳の後半には量を少しに

すれば(園では)食べられるようにはなっていた」と言う。

M子が3歳児の時、私は都合であまり訪れることができなかつたこともあり、私の視野に入ってくるのは4歳児になってからだが、訪れる度、一緒に食べようとよく誘われて食事やおやつを並んで食べた。野菜など嫌いなものが多く、「今日は何か食べられないものはある?」と横から私が食べてやっていた。担任も、減らしてもらおうべくお皿を持っていったM子が、思うほど除いてもらえず皿を持って渋っていると、「後はだめだったら妙子先生に食べてもらいな」などと言うこともあった。

園でブドウ(市販品より酸っぱい)が採れたと周囲が騒いでいても、果物全般が全部だめだとのことでアルミホイルに1粒だけ入れてもらっていたが、結局食べられないからと私に食べてくれるよう言ってきた。おやつに巨峰が出た時は、「これは甘いよ」と私は勧めたが顔をしかめていた。

マンゴーもたぶん食わずぎらいなのだろうが食べようとせず、「こんなおいしいものならいくらだって代わりに食べてあげるけど、食べないなんて絶対損だよ。私はM子ちゃんが生まれるずっと前からこの保育園に来ていけど、こんな高級なのは出たことがないよ、ちょっとだけ食べてみたら」などと力説すると、口にしてみて(甘かったからだろう)食べた。

「この人何食べて生きてるのー」という私の声に、3歳児の時から持ち上がった担任は「M子ちゃんは野菜・果物一切だめ、食べられるのは○と■が少しかな」と言っていたように記憶している。

昨年、5歳児の時の七夕ハッピーデーでは、座るテーブルと仲間を選ぶ時、私を自分のそばに座らせていたが、冷やし中華の上に半分に切ったミニトマトが1個分のっているのを見て「トマトだめだから、妙子先生、助けてね」と言っていた。私はいつものように「いいよ」と答えた。

お皿がいきわたったのを確認したところで、保育者が「減らしてほしい人、食べられないものがある人持っておいでー」と声をかけていた状況かと思うが、M子が、「あ、いいこと考えた。1つは向こうに持って行って、1つは妙子先生に食べてもらえばいい」と言う。

私は食べられないなら、ちゃんと正式なルートでいくらでも減らしてもらえるのではないかとその時まで思っていたが、もしかすると、2つあった場合は、「1つは食べてごらん」と言われるのだろうなと思い保育者に確認すると、いつもそうしている、2つあれば、なめても齧ってもいいので、1つは食べてごらんと促して、全部なしにはしないということであった。結局保育者の方には持っていかず、「妙子先生って、本当は先生じゃないんだよね」「どうしていつもハッピーデーの時ばかり来るの」などと言って席についていた。

M子の言葉を聞きながら、子どもは一緒にいる大人がどういう人なのか、その許容度をよく見ているいろいろ調節しながら自分を出して生活しているということを一当たり前と言えればそれまでだが一再認識させられた。

4歳児の七夕ハッピーデーで、くじ引きで場所を決めた。この時一緒に隣で食べたM子の所で、午睡時に横になった。M子に「一緒に寝よう、トントンして」と言われ、腹のあたりを叩いてい



る私に「トントンはここ！」と胸の上・のどの下あたりを叩くように言われる。先にうとうとしてしまうと「寝ちゃだめだ」と言うので、「だってお昼寝でしょ、寝たっていいんじゃないの」と言うのと、「先生は寝ないんだよ。先生でしょ」と言う。園に行かない時は「あのめがねの先生いつ来るの?」「あのめがねの先生来ないねー」と言っていると担任に聞いた。この時点では先生だと思っていたのではないと思うが、一年の間に（この人は、先生って言ってるけど、本当の先生じゃないな。何だかハッピーデーのごちそうの時だけやってきて座っている人だと理解して、この人には食べられないって言ってよさそうだ）と見ている。先生でないこととある種いいかげんな私の甘さは、食べられないと言いやすかったのかもしれない。いつも一緒に食べようと誘うのは、食べてもらうことが目的—最初からではなかったと思うが—だったのかもしれないとも思われた。

M子は、5歳児の夏には苦手なものをうまく逃れる、ズルをすることを考えていた。このあとクリスマスが近づいた頃に行くと、野菜を食べていた。この時はもう私と一緒に座ろうとすることもなくなっていた。「いつからなの?成長したよねー」とその場にいた3、4歳の時の担任と話した。そして、この2月には酸っぱさに涙しながら、1人最後まで残ってトマトを食べている。

あれほど一緒に座ろうとしたのに、その後、誘われることはついぞなかった。

## ② 家ではトマトを食べないことについて

5歳児クラスの担任は畑づくりに力を入れていた。私がM子のトマトにこだわっていると、担任はM子が園で初めてトマトを食べた日のことを話してくれた。

—初めてトマト（ミニトマトではない）が採れた朝、担任は今食べたいと思い、調理員に相談すると（消毒することになっているため調理室に余裕がない時は出してもらえない）、食べやすい大きさに切ってくれた。みんなが手を出す中、M子は手を出し渋っていて、担任は「嫌いな食べなくていいじゃん」と言ったが、いつも一緒に遊んでいるH子（野菜が苦手）が「食べる」と手を出したのがどのくらい影響したかの分からないが、「食べる」と手を出し「おいくなさそーな顔」をして食べた。降園時、迎えにきた母親に担任がそのことを話すそばでM子は照れ笑いをしていたが、母親に「ウヒャ〜、生まれて初めて食ったんじゃないのー、じゃ、家でも食えー」（こういう気さくで明るい人である）などと言われ、「やだよー」と言いながら帰った。—

お別れ会の日（3月19日）の保育中、私はM子に「お家でトマト食べる?」と聞いてみた。震え上がっていやがる仕草でからだをそむけてから、少し振り向いて「ちょっと（を指で示して）だけはね」と言う。担任を通して母親に同じことを聞いてもらおうと、他の野菜はかなり食べるようになったが、トマトは食べないとのことだ。園では食べなくてはと自分に課して、場によって使い分けている。涙を流しながらトマトを食べようとする意味は大きいと思う。

私の意見に、担任は「母親もM子はトマトが嫌いと思っているので食べさせようとしなさい、出さないのではないかと」言うので、私は母親に「M子ちゃんトマト食べないってことだけど、お母さんもトマト出さないの?」と聞いた。付け合わせに出すこともあるが食べないのだという。母

親の言葉どおりなら、「ちょっだけはね」という言葉も、ここでは食べると言う方がいいと思っ  
てのことかもしれない。食べる・食べなくてはいけない場所と、食べない・食べなくていい場所をわ  
きまえて生活している。

### ③ 食べられるようになることと好きになること

2月19日のおやつにハッサク(1人分、4分の1カット)が出た。身の袋と皮がしっかりついて  
いて、どうやってはがすか、食べ方に工夫が必要だった。はがすのにみんな苦労しながら食べてい  
た。私は食べ終わった後、離れた飯台にいるM子の所に見にいくと、ちゃんと正座して顔をくしゃ  
くしゃにしてハッサクに噛り付いていた。こういう顔を見ると、ああ、食べていることと好きなこ  
とは違うなあと思った。

食べること、食べられるようになることは、即好きであること、好きになることを意味しない。  
自分の嗜好や気持ち優先の世界から、場や周囲の状況との関係で自分の態度を決めるようになる。  
その分、自分の思いに忠実ではないかもしれないが、そういう場が広がってくるのも5歳児だろう。

2月19日の午前中、担任と3、4人の子どもたちが部屋で張子のお雛様に千代紙を張っていた。  
私が張子の作り方に興味をもって尋ねると、担任はそこにいたM子に「妙子さん知らないんだって、  
教えてあげなよ」と言う。M子が気のりしなさそうにしていると、別の子が一生懸命説明してく  
れた。M子はそばで張りながら「これは、さくら(5歳児クラス)のお勉強だよ」と言う。

これは、就学前に張子の経験をさせてみたいと考えていたという担任が保育雑誌を見て作って  
みたもので、節分が終わってすぐの頃から少しずつ作っているというから、2週間くらい続け  
ていることになるだろうか。(小さいのを作るため)水ヨーヨー風船を細長くなるのか丸く膨らむ  
ものか選び、薄くとしたのりに新聞紙をつけて風船に三、四重に張り、その上に和紙を二、三重に  
して土台を作り・など、作り方はなかなか難しそうだった。次のやりたいことへの切り替えに「も  
う遊びに行つて来ていい?」と担任に聞きにくる子がいたり、途中失敗して、担任のものをもら  
つて続けてはいるが、ちっとも面白くなさそうにしている子、母親の話から家で「あーあ、また明日  
も張子か…」と言っているという子どもの姿から、自分に付き合わせてしまっているところがある  
と担任も捉えていた。‘お勉強’は、実に言い得て妙という以外にはない。

保育園最終日(幼稚園と違い、修了式後も1週間子どもたちは普通に登園する/以下、文中、最  
終日と略記)の午後、前日に大掃除をして、ロッカーも空になってがらんとした部屋で、『さよな  
らば私たちのほいくえん』(作詞:新沢としひこ、作曲:島筒英夫)を口ずさんだり、修了式の集  
合写真を見せてもらいながら雑談していた折、何気なく私が「保育園でいろんな楽しいことがいっ  
ぱいあったと思うけど、いやだったなーと思うことはあった?」と誰にともなく聞いた。「あーあ、  
また明日も張子か…」と言っていたという子もたまたまその場において、「うん、あるー。絵とか、  
張子もさー」と言っていた。

自分の中の追い出したい鬼を描いてみようという保育者の投げかけで描いたという絵の自信のな

さそうな線について担任と交わした会話も思い出され、いくつもの工程と指先の器用さが要求される張子の、しかもお雛様づくりはいやなことだったのだと確認することとなった。お別れ会で楽しかったことと、大変だったこと・頑張ったことをあげてもらった際にも、彼は後者に関しては張子と言っていたようだ。

M子の言葉は、気持ちが向かなくてもやらなければならないことがあると分かっていることを示していて、涙を流しながらトマトを食べようとする姿に通じるものがある。最終日に、最近(いつからなのかは担任も知らなかったが、春や秋ではないのでは、ということだ)、塾に行きだしたことを知ったが、‘お勉強’とはそういうものという実感があつてのことかもしれない。

春の頃にはいやがってやらなかったドッジボールも運動会が終わったあたりからするようになり、H子が守ってくれたりして、自分でするようになった。入っていても楽しそうではないこともあるが、すっかり夢中になっていたり、たまに旗を持って応援している。苦手なことに向き合っていくと新たな楽しみを発見することもあるかもしれない。

食べられるようになったが、苦手なものには違いない。以前食べなかったのも、私たちは食べられないと捉えていたが、食べられたかもしれない。でも食べなかった。それで食べられない・苦手と捉えていた。しかし今は、いやだ、苦手で済ませないで、言われなくても、求められていると思われぬ姿に向かって努力する。そういう姿には、保育者はじめ周囲の大人の「ちょっとでも食べてごらんよ、おいしいよ」というかかわりの影響は大きいだろう。だが、本当においしいかどうかはすぐに分かるだろう。好き、おいしいと思えなくても食べるのは、そのかかわりの中に大人が持っている価値を感じ、それに真摯に向かい合って、求められている姿をあるべき自分の姿にしようとするからだろう。

最終日の給食メニューの、コロケの付け合わせのおひたしには人参、白菜、ブロッコリーなど何種類もの野菜が入って色とりどりだった。同じテーブルにいたM子に、以前の彼女のイメージで「お野菜食べられる?」と言う私に、「(えっ、なんでそんなこと聞くの?)」というような顔で「えっ、あたし食べられるよ」と言って平気な顔で食べていた。おやつは(また)ハッサクだった。私はM子と同じ飯台で割とそばにいて、自然に2月19日のM子の顔を思い出し、「M子ちゃん、これを、顔をくしゃくしゃにして食べるんだよねー」などと言って、ひとり勝手に面白がっていた。私の思考の脈絡をどう取ったかは分からないが、「食べられるよ」という、いたって平気な言葉と表情が印象的だった。

私の言動が、そう装わせたのか、ひと月を経た成長の姿なのかは分からない。両方かもしれない。だが、2月19日のあの顔の片鱗もなく、淡々と食べる姿には、しっかりしてきたなと思えるものが確かにあって、入学前ひと月あまりの、子どもの成長にとっての大きさを思った。園には通ってきていても、1週間前に修了式を終え(卒園し)ている。前回のハッサクと今回のハッサクの間にある、卒園や入学準備といったハレの体験もその根底にはあるのかもしれない。

## (3) H子の場合一少しずつ、自分への挑戦

2月19日のメニュー：大豆と桜えびのかき揚げと野菜のおひたし（副食皿）

ジャガイモのそぼろ煮（椀）

今日の給食の大豆はさくら組が採ったものだと言われ、給食当番が食器を取りにいったと聞いてきたので、担任が話題にしたことから、大豆はどこにあるか、他に何が入っているか、子どもの中から、「なんか黒いのがある、なんだ？」という声が出て賑やかに食事をしていました。ほとんどの子が食事を終え、担任も「もうとっくに小学校のキンコンカンコンなっちゃったよ、食器を返さなくちゃ」というようなことを言っていた頃だったと思う（11:30 過ぎ頃から支度をして食べだして 12:30 頃）。

ふと見ると、私の左隣に座っているH子の皿には2つ（最初から2つ）のかき揚げが残っていた。「あれっ、H子ちゃん食べていないんだ。てんぷら嫌い？てんぷらは油のにおいがしていやかな？」と本人や担任に言ったりしていた。H子は「食べていないんだ」という私の言葉にかすかにうなずいたと思うが、理由は言わなかった。担任は、「H子ちゃんは野菜が苦手」と言っていたが、添えられていた野菜のおひたし（青菜、キャベツ、人参など）は全部食べていて、皿にはかき揚げだけが、配られた時のまま残っていた。その2つは、大きさが違って、大きい方は小さい方の1.5倍ほどあったと思う。H子は、明らかに大ききの違う2つのかき揚げを箸であっちこっちと触り、ちょっと首をかしげて考えていたが、隣に座っていた私に「妙子先生、こっち食べてくれる？H子、こっち食べる」と大きい方を食べることにする。「大きいのを食べるの？」という私の言葉にしっかりとうなずいて、食べた。おかげさかもしれないが、心なしか〈意を決した〉ように感じた。

私はもうかき揚げのおかわりはいくつもして満腹、4月の「特定健康診査」も気になって、おかわりも夕食を減らすつもりでしたのだった。おかわり分のかき揚げは配膳台の皿にこんもりとまだ余っていて、どうせ食べるならそちらの方がいいという気持ちもあった。私はよく、子どもが食べられないものを食べてあげるが、それは手をつけていない場合で、手をつけたものは断る。彼女の逡巡する気持ちの表れでもあったかのような、あっちをさわりまたこっちをさわる箸の動きも見ていたので、いやだったが、ここは断れなくて「いいよ。私が食べてあげる」と言った。園生活の中で残すことがいけないとされているようなことはないが、H子の中に皿をきれいにして返したい思いがあるのだな—と思った。

## ① 苦手なものは大豆？

私は（メニューから）このかき揚げは、大豆と桜えびで作ってあると思っていた。おいしかったので家で作った際に、味が違う感じがして他の保育者に尋ねるとピーマンが入っていたという人がいたが、自分が食べたものには入っていたようには見えなかったと思った。低年齢から順次配膳するため、油の温度が上がるせいか5歳児の衣は少し茶色が濃く、大豆と桜えびは衣に同化してよく

判別ができなかった。しかし、桜えびの目は黒くあちこちに残っていて、私の右隣で、E子は箸でつまんだかき揚げをじっと見て、「なんか、この目、オタマジャクシみたい」と言って食べていた。3、4歳児の頃オタマジャクシの卵を孵した経験もあり、その過程に確かこんなふうに見える時があったような気もして、油のおいでなければ、この目が気持ち悪かったのかもしれないと思ったりしていた。

後で、調理員に聞くと、大豆と桜エビ、タマネギに、ピーマンと小女子が少しだけ入っていたということだった。小女子は食べている時、私は確かに1つ判別していたが、野菜は入っていても、見た目には分からない状態で、一口も食べていないH子には分からないはずであるし、野菜のおひたしは全部食べていたので、「野菜が苦手」という担任の言葉は、私にはずっと腑に落ちなかった。その後も、かき揚げにこだわって「節分の豆まきの豆（5歳児が収穫）は食べたよね」などと確認する私につき合わされていた担任が、「豆が苦手なようです」と知らせてくれた（2月28日）のは、以下のようなことがあったからだ。

その後2月27日に五目豆が出た。「減らして」と持ってきたので担任が、「ねえH子ちゃん、この中の何が嫌いなのもしかして豆？」と聞くと「うん、ちょっとねー」と言った。

だが次（3月5日）に大豆のトマスープ煮に、マカロニ、大豆、肉などが入っていた時には、自分でよそわせていたが、驚くほど山盛りよそっていき、全部食べたそうだ。

トマトケチャップやマカロニという、子どもが好みそうなものとの組み合わせや洋風の味付けと、五目豆のような和風の組み合わせや味付けも影響しているのかもしれない。いつも大豆が苦手というのではなさそうでもある。この話を聞いた後で訪れた際（3月19日）、「H子ちゃんは大豆が嫌い？」と聞くと、唐突な私の質問に「えっ？（と少し驚き）うん、まあちょっとね」と言っていた。

## ② 箸の動きにみる逡巡と大きい方を食べようとする事

「給食室にお皿を返さなくては」「○さん（調理員）が困る、お皿を洗うのを待っている」という言葉をこの園の保育者はよく使う。せかさされているわけでも、早いことが即よいとされているわけでもない園生活の中で、待てるリミットを示す言葉である。本当にそれがリミットかどうかは検討の余地があるかもしれないが、子どもにはそういう伝わり方をしていると思う。T男やH子の2月の事例はそれをよく示している。

それまで手をつけなかったのだから、（大豆への？）苦手意識はあるだろう。だが、ぎりぎりのところで食べる、しかも大きい方を食べる。苦手なものへの挑戦・対処の仕方として、少し減らしてもらいやり方と少しだけ食べるやり方がある。苦手ならば、小さい方を食べる方が楽だろう。昨年7月の七夕ハッピーデーでの姿を思い出し、大きい方を食べるところにH子らしさがあるのだと思う。

M子に「トマト助けてね」と言われた私は、片方をとってあげ、種のところがないくらいに小さくカットされた方を残し、これは食べてみたらと言うと、M子はちょっと渋った表情だった。M子の前の席で、H子が「M子ちゃんがトマトいやなのは、だって、M子ちゃん、この、口のところにぼつつんができて、しみるからなんだよ」と言い、M子は口を開けて、私に説明するのに一生懸命だ。

私は、「それは口内炎って言うんだよ。しみるよね。じゃあ、今日はいいよ。私が食べてあげる」とトマトなしにしてあげた。H子は、「(自分も食べられないのに) M子ちゃんばかりずるい」と言う。「あなたがM子ちゃんのここがしみるって言ったから、助けてあげただけど」と私は言ったが納得せず、「だって、M子ちゃんのは本当に小さいのでしょうか。その小さいのも食べないで、食べてもらってずるい」と言う。すでにM子のトマトは食べてしまったし、私も収受がつかなくなつて「じゃあ、そう言うんだったら(と、私の皿の中の小さめなのをとり)、食べてみる?」とあげると、M子は友達同士の見張りのような中でいやいや食べた。

同じ、皿をきれいにするにしても、いつとき、皿の上を巡る箸に迷いを見せながらも、少し減らしてもらつてみずから大きい方を選ぶ(自分への挑戦) H子だからこそ、1つ減らしてもらつたのにほんの小さなトマトもなしにしてもらっていることが、しみるというM子の事情が分かっているても許せなかったのだと思う。

### ③ 閾値の高さを示すエピソードとその変容

昨年の七夕パーティーの同じテーブルに4歳児が2人交じっていて、「残しちゃだめなんだよね」と言いながら食べていた。担任に言うと、「え、本当?でも私はそんなに強く言っているつもりはない」と言う。私もちょっと面白がつて「ああ言っているよ」「こう言っているよ」と報告してただけで、担任がすごく強要する人だとは思っていないが、子どもの言葉から聞こえてくる理解は、「残しちゃだめなんだよね。あやめさん(4歳児クラス、自分にあやめさん)は、たまにそういう子がいて先生は認めているけどさ。でも、残しちゃだめなんだよね」と言って、食べられなさそうだった冷やし中華を全部食べてから、最初に配られて目の前にあったスイカに手を出した。果物はいつもおやつに出る。昼食のメニューに果物がつくことはない。今日は5歳児が作ったスイカが採れたというので特別だった。

私の隣にいたH子は冷やし中華が食べられずにいた。スイカを見て、「食べたいな」と言いながら、なんとか冷やし中華を食べようとしていた(時間がたつほどに麺はふやけて量は多く感じられる)ので、私は「それ全部食べてからだとスイカが食べられなくなるから、もう、そっち(冷やし中華)を残してスイカ食べたら」と言うが、自分の中の閾値が結構高くてか一生懸命食べようとしている。

私に言われて三角のスイカの上のほうだけ一口ちょっとかじってみる。そのタイミングで「そっち残してスイカ食べてもいいんじゃないの」と言われても、じゃあ、そうしようとはならず、「ちょっ

と味見しちゃった」と言って肩をすくめ、また冷やし中華を食べる。そして、先述の4歳児の言葉。時々、あやめさんにはいても、H子はさくらさん（5歳児クラス）だから、そういうわけにもいかないのか食べていた。私は「食べたくないのをあまり無理して食べると、おなかによくないよね」みたいなことを2回ぐらい言った。うち、1回は4歳児にも向けて言った。すると、それで安心したかどうかは分からないが、H子は冷やし中華を残してスイカに移った。私が「ほら、おいしいでしょー」と言うと、うれしそうにうなずいた。

4歳児の時、女兒は3人（秋以降5人）だけで、私は彼女らとともに仲良しだった。その姿を見て、8月、担任は「H子は、私にはこういうふうに分を出してこない。延長保育担当Sさん（地域の主婦、無資格）にも自分を出してベターと甘えたりする」（私がSさんに確認すると肯定していた）。「H子にとって私って何だと思います?」「彼女には強くは出られない」と言っていた。5歳児の時の担任も、春の頃は、それじゃだめだよというような否定的な（本当に否定するつもりなど毛頭ない）ことをちょっとでも言うと、萎縮させてしまうような気がして言えなかったという意味のことを言っていた。

一気にスイカにいかず、スイカの誘惑に「先っちょだけ食べてみた」と、勧めた私に報告しながら、また冷やし中華に戻る。成長するにつれて期待されている姿、こうありたい姿もあり、分かってもらえる。こうあらねばという思いも人一倍強くあるので、そこに至らない姿を容易に出すこともしなかったのだと思う。担任がどうこう言っているとか、強く締めているということではなく、子どもはその辺はちゃんと見てやっていると思う。

しかし、今は、H子も「減らして」とか「もう食べられない!」と持ってくるなど、〈できない自分〉も表すようになってきた。《以前は、そんなことは言わず、体を硬くしていた。野菜など不得手なものも多く、そういう時は、もう席にお皿を持っていく時から歩く速度がとてゆつくりになるので、「H子ちゃん大丈夫?減らそうか」と声をかけるが、「いい」と肩に力が入っていることが多かった》と担任は振り返る。

クラスで一番に一輪車に乗れるようになって、どんどん乗りこなすだけでなく、周りの子が乗れるようになるのを手助けし、乗れるようになっていくのを自分の喜びとする、活発にドッジボールを楽しむなど、自信をつけたこともいろいろあったようだ。担任が「私も彼女に何でも言えるようになってきた」と言うように、互いの関係も夏頃から変化してきた。

お別れ会メニューにあった（人参サラダの付け合わせの）ブロッコリーを担任が「食べてあげようか」と言うと、「ううん、いい。H子、この頃おうちでもお野菜食べてるの」と言ったという。少しずつトライしている彼女の意思が見える言葉だと思う。

#### (4) K太の場合—成長への自負とブレーキ

—2月頃かと思うが、K太が母親に連れられて病院によって登園した。ちょうど昼食にしようというところだったので、K太の母親も勧められておかわりとして残っているものを試食しながら担

任と話をしていた。K太はおかずをおかわりしたい気持ちがあるようだったが、ごはんが残っていておかわりができないでいた。その様子に担任は、「ご飯がいっぱいで、こうやっていつも苦戦するんだよねー」と日頃の様子を母親に告げた。K太は家では小食で、母親は保育園なら食べ（させてもらえ）るのではないかと思うのか、いつもご飯が他の子より少し多めである（からだも小さめである）。

栄養士の要請で年2回ほど、園で、各自が家庭から持参するご飯の量を量っている。担任は「この間量った時、結構いっぱいだったよ」とたまたま手元にあったみんなの計測値の表を母親に見せた。母親はそれを確認しながら、家でK太が「保育園でおかずをおかわりしたいからご飯を少なくして」と言う、と担任に話したそうだ。「あー、おかわりしたいな」とため息混じりに言うK太の脇で母親は「(おかわり) してくればいいじゃない」と言っていた。

こういう時、自分なら家庭で小学生のわが子らに「好きなものばかり食べちゃいやだよ。こっちも食べて」と言うという担任は、K太の母親のかかわりに彼の家では好きなものを好きなだけ食べても何も言われぬのだと推察しつつ、彼はどうするだろう、母親の勧めでご飯を残しておかわりに行ったら周りの子は何と言うだろう、真似してしまうのではないか、そうしたら今までのことが崩れてしまうと内心ひやひやしながら黙って見ていたそうだ。K太は母親にそう言われても、はあ〜とかすかにため息をつきながらご飯を食べていておかわりには行かなかった。(園では、最初にあるものを全部食べてからおかわりをさせていることを知らないらしい) 母親は、そばで「?」という感じだったのではないかと言う。—

担任のこの話を、3月の声を聞く頃、興味深く聞きながら、私は2月19日の帰りの会でのことを思い出した。2日後に近づいてきた一日入学の話を担任がした。私は0歳で入園したC男のつまり立ちの一こまをふと思い出し、彼に「学校かー、たんぼぼ(未満児クラス)の赤ちゃんだったのねー、みんな」と言った。C男本人は「えっ、ぼくが」というというような感じだったが、自分も2歳児入園でたんぼぼ組にいたK太は、カバンを持って帰りの会の輪に近寄りながら、「妙子さんだって赤ちゃんだったじゃん」とむっとしていた。私は幼かった彼らの断片が懐かしく思い出され感慨深かったが、彼は大きくなった誇りを傷つけられた感じがしたのだと思った。

保育園最終日、私も含めた大人対子ども(4、5歳児。大人は3歳児担任も参加)でドッジボールをした。とても強い球を投げるK太に驚いて「K太ちゃん、いつからこんな強い球投げられるようになったのー!」と言うと、その度に面白くなさそうな顔をしたり、蹴ったりしてきた。投げる球の強さだけでなく、心なしか身長も伸び、体つきもしっかりしたような感じも抱いていたし、「K太ちゃん言うな!」「K太ちゃんじゃない!」とも言っていたので、彼の気持ちは分かっていたつもりだったが、私の中で、彼が2歳児の時のある場面がいまだに印象深いものであるからか、つい、「ちゃん」づけで呼ぶ場面がこの日に何度かあった。考えてみると、これまでK太に対しては「くん」づけで呼んだことがないような気がする。この日の終わり、卒園児と握手をするセレモニーでも「ちゃん」づけで呼んで、苦虫をかみつぶしたような顔をさせた後、帰りの会に、部屋に入っていくと、彼は真剣な顔で「妙子さん、もう俺のことK太ちゃんって言わないで」と言ってきた。



もう、明日から保育園に通ってくることはない。だが、あるいは、それゆえにか、学校に行くくらい大きくなったという誇りは、赤ちゃんだった自分と重ねて見られることや‘ちゃん’づけの呼称を嫌う。それらが、幼さや非力さを示すからだろう。

彼が私の言葉にむつとした日の前日（月曜日）、体調が優れずほぼ1週間ぶりに登園し、「風邪引いてるから、ドッジ、パス」と言っていたM子を、人数が揃わなくて何人かの男児が誘いにいった。担任が朝見たお便り帳に、“あまり暴れないようにすると本人が言っています”と自宅から書いてきているとおり、「咳が出るから動かない」と最初は渋っていたM子が、K太に「大丈夫、動なくても入ってさえくれれば、俺の後ろに隠れていれば俺が守ってやる」と言われて入ったと、その日に聞いた。私たち大人には微笑ましかったが、考えてみると、他者を守ってやれるくらい大きくなった自分を感じているから言える言葉だと思う。もう幼くもないし、非力でもない。小学生という新しい世界の入り口にいる自負は誰に言われるまでもない、自分でブレーキを踏む力になっている。

#### IV. 見えてくる5歳児の育ち

##### —自分でブレーキをかける・自分の中に規範をもつことのできる年齢

給食のおかずの皿という小さな世界にも、乗り越えがたいものや思いがあって向き合っている。ゆっくり自分のペースで片付けながら越えられないところでトマトに向かい合っていたT男、一転して、とにかく園では食べないと…と今は思っているらしいM子、ぎりぎりのところで自分の力を量りながらワンランク上のことを自分に課して押し上げていくH子、成長への自負に満ちているらしいK太、それぞれの皿にある苦手なものにどう向かうかにその子らしさがあった。いろいろな子どもがいて、食べられないもの、苦手なものにどう対処するかは、もちろん一様ではないだろう。もっと年齢が低ければ、その思いのままに顔を背けても食べないことだろう。

ここで見た5歳児の姿に至るには、もちろん保育者はじめ周囲の大人のかかわりの影響は大きい。また、子どもは園だけで生活しているわけではない。この地域はまだ三世大家族も多く、祖父母に、「残さず食べなさい」「そっちばかり食べないで、こっちを食べてからにしなさい」と言われることもあるだろう。こうしたかかわりの中で、ある時期から、周囲はどうであっても自分としては乗り越えようとする。それぞれにそのハードルも乗り越え方も違う。しかし、いやだ、苦手という自分の思いにブレーキをかけて、それまでの過程で求められてきた姿をあるべき姿として自分の中にもっているのだと思う。自分で規範をもつことができるように育ってきた姿だと思う。

かつて、ある園で、食事の時間になっても部屋に入って来ない数人の5歳児の姿をきっかけに、いつ食べるのかを子どもが自分のおなかにきいて決めるようにしたことがあった\*。それをめぐって出た意見の1つに「自分なら口をこじあけても食べさせられる」というものがあった。こじあけるとは、うまくその気にさせることができる（テクニックがある）ということを意味していたのかもしれない。だが、5歳児ともなれば、その時どきに、自分なりのやり方で自分の力を量りながら、

それぞれに目標を設定して到達へのトライをしている。

そう考えると、以下に示したような、いろいろな園でよく見かける成果表も子どもの達成動機を促すテクニックの1つと言えるだろうが、その導入に際してある、食べるということに対する保育者側の価値観、根底にある5歳児の育ち、その子ども観(担任の見取りを含む)、保育観では、こうした5歳児の姿は視野外になっている。もっと広く知ってほしい5歳児の姿である。

#### ある幼稚園5歳児クラスでの出来事 12月

壁に、全部食べると自分の名前の所にシールを貼る表があり、給食(業者の弁当)と弁当(家庭から持参)でシールの色を違えていた。春から毎日やっているもので、訪れた12月半ばには完食できる子とできない子の差が歴然としていた。弁当も給食もいつも完食らしく表を下から上へ何往復もしている子、弁当の完食を示すシールの多い子がいる一方で、ある子の所は弁当の完食を示す色のシールが数個あるだけで真っ白であることが気になった。

担任によると、この子は好き嫌いが激しく食べられるものがなかなかない、もう少し食べてくれるといいと思うが職も細いということだった。私は、週に給食が3回で弁当が2回という割合も影響しているように思った。担任は、この表が子どもの心の負担になっているようなことはなく、むしろシールを貼るために頑張るって食べようとするなど励みになっている気がして、ずっと続けていると言う。

## V. おわりに

ここでは食の場、給食のおかずの皿から見えたものをとりあげたが、苦手なもの、嫌いなことは、日常のいろいろなところにある。子どもは、そこでもまた、乗り越えたいものに向き合っていくことだろう。時には大人の手を借りて、時には大人の示す価値を指標・道しるべとして…。そのプロセスが幼児期の成長であり保育である。それを保育者は支えている。

次の課題としては、場面を人間関係に絞って苦手な人・嫌いな人にどう向き合っていくかを、先行研究とは別のアプローチでやはり事例にとことん拘って描いてみたい。

\*以下の拙稿に詳しい。

- ・「食事の取り組みに見る子どもの主体性」金城学院大学論集、通巻第151号(人間科学編第18号)、73-122.1993
- ・「生活の場面に焦点を当てて」戸田雅美編著、保育内容総論の探求、相川書房、65-80.1998

#### 引用文献

- 1) 2) ミネルヴァ書房編集部編(2008) 保育所保育指針 幼稚園教育要領 [解説とポイント]、ミネルヴァ書房、248

厚生労働省編 (2008) 保育所保育指針解説書, フレーベル館, 77-79

内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2014) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領,

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/law/kodomo3houan/pdf/seisyourei/h260430/c1-2-honbun.pdf> (情報取得 2016/12/15)

- 3) ミネルヴァ書房編集部編 (2008) 保育所保育指針 幼稚園教育要領 [解説とポイント], ミネルヴァ書房, 249-250
- 4) 厚生労働省編 (2008) 保育所保育指針解説書, フレーベル館, 78-79
- 5) 第9回保育の実践と研究シンポジウム (2008) テーマ:5歳児の遊びと生活 7. 討議, 保育の実践と研究 13 (1), スペース新社保育研究室, 26-27
- 6) 辻谷真知子 (2014) 幼児間の規範提示と排除・包摂, 保育学研究, 52 (1), 31-42
- 7) 辻谷真知子 (2014) 4歳児クラスにおける幼児間の規範提示—根拠の明示と関係性に着目して—, 保育学研究, 52 (2), 53-65
- 8) 辻谷真知子 (2015) 4歳児の「許可を求める発話」に見られる規範意識—判断基準としての他者参照—, 保育学研究, 53 (1), 31-42
- 9) 前掲 (6), 31
- 10) 前掲 (6), 41
- 11) 前掲 (7), 53
- 12) 前掲 (8), 31
- 13) 松永愛子・大岩みちの・岸本美紀・山田悠莉 (2013) 3歳児の子ども集団の「規範意識の芽生え」における保育者の役割—非言語的応答関係による「居場所」生成—, 保育学研究, 51 (2), 75-86
- 14) 青井倫子 (2000) 幼児の仲間入り場面における規範の機能, 幼年教育研究年報, 22, 45-52
- 15) 前掲 (7), 60
- 16) 前掲 (7), 57-58

#### 謝辞

担任はもとより、職種の異なる職員の方々にも大変お世話になりました。

多忙な中、こうした、実践の後追いの作業にお付き合い頂き、その時点での最大限の対応をして頂いたことに深く感謝申し上げます。

#### 付記

本研究は、第9回保育の実践と研究シンポジウムのシンポジストとしての提案を、その後、求めに応じて詳細に記した「給食のおかずの皿に見る5歳児の姿」(保育の実践と研究 13 (1) . スペース新社保育研究室, 2008) に、規範意識の育ちという点から加筆・修正した。

(2016年9月28日受理)